

## 愛晃会文化賞・選評

愛晃会文化賞審査委員長 岩崎 淳

(学習院大学文学部教育学科教授)

愛晃会文化賞が四十二回目を迎えました。心よりお慶び申し上げます。昭和から平成そして令和へと連綿と続く伝統ある本賞の審査に関わることができ、まことに光栄に存じます。

一つのことを続けるのは容易なことではありません。関わる人の数が多くなると、それに比例して考えなければいけないことが増えていきます。決して変えてはいけないこともあれば、柔軟に対応しなければいけないこともあります。

令和二年は特別な年となりました。疫病の蔓延によってわたくしたちは見えない敵との戦いに直面しました。学校でも、また一般の企業や公的な組織でも、通常の業務の他に、諸計画の変更、衛生管理の徹底、関係者の心身の健康への配慮等々、実行していかねばならないことが次から次へと現れました。このような状況において、愛晃会文化部の皆様、晃華学園の先生方の献身的なご尽力によって、本賞の募集及び審査が行われました。たいへんなご苦心があったことと拝察しています。残念ながら、今年度は英国研修が実施されなかったため、パディントン賞の授賞はありませんが、その他は例年同様に作品が選ばれました。

今年度の特徴の一つとして、社会的な問題や人間の生き方について正面から向き合った作品が多いということが挙げられます。十代は、社会に対する関心が強くなったり自分自身の人生について意識しはじめたりする時期です。今年度はとくに、感染拡大にもなって生じた諸問題や生活のあり方に着目した人が多かったのでしょうか。

もう一つの特徴として、最終審査に残った作品の中には、エンターテインメント性の強い作品が多いということが挙げられます。「世相が暗いと明るさを求める」ことが昔から指摘されている通り、文章世界に楽しみを求める人が多かったのかもしれない。人々の心を明るくすることは、文化の一つの力です。文章を読んだり、書いたりすることで、心が慰められ安定します。

考えるという行為を繰り返して人は成長します。書くことを通して、自分の頭の中が整理され、思考が深まっていきます。書き上げた文章は到達点であると同時に、新たな出発点でもあります。その積み重ねによって、自分自身の考えが精緻になっていきます。

思考力や表現力が大切であることは誰もが意識しています。しかし、きっかけがなければ人は真剣に考えることも、文章を書くこともしません。考えることも

書くことも多くのエネルギーを使うことだからです。一編の作品を作り上げる過程では、楽なことばかりではありません。書くという行為だけではなく、表現すること、創造することには通常苦しみが伴うものです。

何もしないほうが楽でよい、と思うのは自然な感情です。一方、努力を重ねて向上していきたいと思うのも自然な感情です。文芸でも音楽でもスポーツでも、およそ文化というものは、そのような人々の営為によって発展してきました。

愛晃会文化賞に応募することは意義のある行為です。晃華学園に学ぶ生徒だけに与えられる貴重な機会です。令和三年度も多くの応募作品があることを願っています。

## 愛晃会賞

### 朝顔病院（中二 M・S）

冒頭部に「恐ろしい傾斜」「憂鬱な気分」「地獄坂」「疎まれてる」「ため息」「やっとの思い」「代わり映えのない日常」「退屈で仕方がなかった」という暗いイメージの言葉が集中して配され、登場人物である早瀬菜々が何らかの問題を抱えていることを予想させます。中盤の病院の場面では、菜々の苦しみの内容が明らかになることと登場人物がタイムスリップしてしまうことが合わせて描かれ、その鮮やかな展開は読む者を物語の世界に引きこんでいきます。人物造型の設定と書き分けが上手である点や向日性を感じさせる点が魅力的です。最後の場面にも工夫があり、全体的によく考えられた作品であると感じます。

## 審査委員長賞

### 休校中、進路を考える（高二 O・A）

自分の進路に関して明確な目標をもっている人がいます。一方で、「進みたくない方向はあるけれども、それ以外はよくわからない」と思っている人もいます。将来を楽観している人もいれば、漠然と不安を覚えている人もいます。人生は後ろ向きのまま進んでいくことに似ているとわたくしは考えています。これから先に何があるのかは見えていません。通り過ぎてから、自分は今このような道を歩んでいるのだとわかります。先のことには誰にもわかりません。生きていく以上、それはしかたのないことです。この作品の良い点は、大森さんが自分の現在と将来とを真剣に考え、心の動きを丁寧に書いているところです。性急に結論を求めず、裁判を傍聴した経験をどのように受け止めたのかを記述している最後の部分に聡明さと思慮深さが現れています。

## 優秀賞

### アパルトヘイトを知って学んだこと (中二 K・R)

この作品の中の「人を嫌ってしまおう」ということは、どこの国でもどんな人でも日常的にあると思う」という言葉は、人の心の本質をついています。「差別のない世界をつくる」と口で言うのは簡単ですが、その実現は容易なことではありません。そして、それを維持していくためには多大な努力が必要となります。それを可能にするためにはどうしたらよいのでしょうか。そのヒントを得るためには歴史に学ぶことが有用です。金山さんは、ネルソン・マンデラの伝記から、過去にどのようなことがあったのか、その陰にどのような経緯があったのかを読み取ったうえで、人と関わるときに、自分はどうのようにしたらよいのかということとを真摯に考えていきます。実りの豊かな読書経験だったということがよくわかります。

### 朗読劇脚本「焼きそばの夢」(中三 I・H)

脚本の執筆は難しいと言われます。自由の高い詩や小説に対して、脚本には固有の制約があるからです。とくに、オリジナル脚本の執筆は、原作を脚本化するよりもいっそう難しいものです。ストーリーを作り、登場人物の造型を設定し、その台詞を考えることは容易なことではありません。果敢に挑戦した井上さんに拍手を送ります。基本的に、演劇は不自然なものです。観る者にそれを忘れさせて作品世界に引き込むのは、脚本の他、演技・演出・音響・照明・舞台装置他、さまざまな力によるものです。脚本は、文字だけで作品世界を成立させなくてはならず、読む者の想像力が不可欠です。この作品では、会話とモノローグの使い分けをはじめ、いろいろな工夫がされています。

### 風が吹く、笑顔が咲く。(中三 K・A)

川江さんは、「季節外れの紫苑」という作品で、令和元年度の愛晃会賞を受賞しています。そのときの選評で、「中学二年生で、これほど長い作品を大きな破綻なく書き続けるということ自体、川江さんに文章を書く力が豊かにあるのだということを示しています」とわたくしは書きました。「二年生」を「三年生」に代える他は、今回もまったく同じ思いを抱いています。この作品には、さまざまな謎が現れます。この人は誰なのか、今は何が起きているのか、次はどのような展開になるのか等々、読む者を引きつける力がこの作品にはあります。最後の場面も印象的です。

岩崎 淳（いわさき じゅん）

学習院大学文学部教授

著書『いまを生きる論語 大人になるために読んでおきたい古典の教え』『新しい国語科教育』基本指導の提案』（以上さくら社）、『言葉の力を育む』『古典に親しむ』『授業改善をめざす』（以上明治図書）